

すべてが真剣勝負！めざすは法曹界

法律家としての技術と心を磨く場

私たち編集員が教室に入ると、教授をUの字に囲んだ形で、緊張した雰囲気の中、なすすべにゼミが行われていました。人数は20人程度。渥美東洋教授の『刑事訴訟法』ゼミです。

この渥美ゼミは、3年次、4年次の2

年間を通して行われます。刑事司法上に起こる、様々な問題を取り上げ、捜査段階から裁判確定までの過程を具体的に分析し、評価しながら解決方法を考えていきます。

ただ単に条文を読むのではなく、個人の自由を確保するための法について、また、個人の自由、生命や財産を奪う犯罪に適切な措置を取り、なおかつ刑事裁判であっても人の自由を保障し、誤判のないようにするにはどのような改善していくか、という理論と実際の双方に注目しつつ議論を進め、活発な討論を2年間重ねています。

法律家の第一歩は「尊敬できる友人をもて」

このゼミを擁する中央大学法学部法律学科は、だれもが知るように、英吉利法を前身に100年余りの歴史と伝

統をもち、日本の法曹界の一翼を担っています。そしてこのゼミは、全法曹界の人間の1パーセントを輩出しているといわれている大御所。

渥美ゼミを選択する学生はほとんどが、法律家をめざしているだけに、もちろん挑む姿は真剣そのもの。個人の自由を守る法律家としての心をつけることがなにより要求されます。

「隣の人を尊敬できる人間になれ」「自分勝手な知識でなく、『知的』になること」という言葉が、教授のもつばらの口癖と

3年次では基礎づくり、4年次ではより実際に展開

中央大学法学部法律学科では、教授の指導のもとで特定分野を深く掘り下げて学習していきます。3年次から専門ゼミが始まります。開講数は100近くにもなっています。

『訴因制度』『迅速な裁判』など、また、証拠班であれば、『伝聞法則』などのテー

いわゆる大学受験のための語学や、高校での授業ではなく、外国の文献を読み、



走れ！研究室



プロフィール

中央大学法学部 渥美 東洋教授

1935年生まれ。中央大学法学部卒業。中央大学教授、立教大・学習院大を歴任して慶應義塾大学講師。現在、司法試験審査委員。専門は刑事法、とりわけ刑事訴訟法。著書は『刑事訴訟法』『捜査の原理』(有斐閣)、『刑事訴訟を考える』(日本評論社)、『レッスン刑事訴訟法』上・中・下、『米国刑事判例の動向』I・II (中央大学出版部) その他。



渥美ゼミの場合は、3、4年次で各募集を行うこととなりますが、一般的には3年次に履修した学生が、そのまま4年次も履修する形になっています。

入室にあたっては、筆記試験が課せられます。試験内容は、『憲法における司法上の人権』『司法制度』について。それにより約20人が決定します。

入室が決まると、ゼミが始まる前に、まず取り上げる問題を選択。3年次の基礎ゼミでは、刑事訴訟のテーマを捜査、公判、証拠の三つに分けて、グループ分けを行い、各自が1年間、そのグループの中で取り上げるテーマを一つ決めて、研究していくことになります。

例えば、捜査班であれば、『逮捕・拘留』『捜索・押収』など、公判班では、

学科は、だれもが知るように、英吉利法
律学校を前身に100年余りの歴史と伝

『訴訟制度』『迅速な裁判』など、また、
証拠班であれば、『伝聞法則』などのテーマが決まります。

その研究内容を毎回一人のレポーターが発表。その発表内容から、質問や討論などが行われます。教授の指導は厳しく、レポーターでなくとも、常に発言の機会があるので、自ら勉強していないと立ち遅れたり、深く追究できないことは言うまでもありません。

そのため、ゼミは週一回ですが、いわゆる『サブゼミ』というのが、学生同士で自主的に行われます。発表者のレポートを、同じグループ内の人たちと、理論構成や裏付け、問題点などを意見交換検討し、ゼミに臨むこととなります。

ときによっては、毎日のように研究室に遅くまで残って取り組むことは当然のこと、普通のゼミと比べてみても、だいぶハードということがいえるかもしれません。

さらに、4年次の応用ゼミではこうしたことを発展させ、取り上げる判例は、年間二百数十項目になります。

最近「静か」な傾向 積極的な学生を求む

法学部に進もうとする高校生に対して、渥美教授いわく、『外国の書物を数多く読むこと』。

が始まります。開講数は100近くにも
なります。

いわゆる大学受験のための語学や、高校の授業とは異なり、外国の文献を読み、様々なことに目を向け、興味をもち、自分で考え判断することが必要ということ。また、現在、渥美教授の研究は、『個人主義の復権』と語られます。東西幅広く取り組んでおり、この問題に関しては、アメリカやイギリスではかなり進んでいるが、日本では軽視されているとおっしゃいます。

最後に、ゼミ生の一人、3年生の鈴木秀洋さんに、ゼミの魅力を語ってもらいました。

「ゼミはいろいろな意味でダイナミック。高校のように答えというものがなく、問題意識をもち、とことんつきつめなければなりません。先生の熱意や友人との話し合い、すべてが真剣勝負で、理論技術だけでなく、心まで学ぶことができます」



人生観を変えたパワフルな講義が学生に人気